



「夢で会えたら」

津々井 茜

1

胸がしめつけられそうに愛くるしくて、あどけなくいじらしかったみゅう。獰猛な野獣の本性もそなえていて、ネズミをとらえて首と身体を爪と歯で引き裂いたりもした。食いはしなかったが、内蔵を破裂させて遊んでいた。

狩が上手なみゅうは、雛鳥をつかまえてきたりもした。半死の状態の雛鳥をくわえて唸っていた猫のみゅう。みゅうと喧嘩をして雛鳥を奪い返したときには、俺の手は傷だらけで、雛鳥はずでに死んでいた。

「ごめんな」

庭に雛鳥の墓を作り、どれが親なのかは知らないままに、樹の枝に並んでいる鳥たちに詫びた。さーっと舞い降りてきて俺の頭をつついていった鳥が、おそらくはみゅうに殺された雛の親だったのだろう。

死んでしまった鳥にはみゅうは関心をなくした様子だった。だが、夜になって庭で物音がするので覗いたら、猫になったみゅうが雛鳥の墓を掘り返そうとしていた。

時にはぞーっとさせられたけれど、眠っているみゅうは猫の姿でも少女の姿でもひたすらに可愛かった。

あのころには恋人だった紅には、みゅうが変身猫だと話したのだが、彼女はまったく信じてくれず、俺をロリコンだと罵って去っていき、それきり音沙汰も途絶えた。俺は紅に恋をしていたからこそ話したのだが、ふられてしまったのだし、信じてくれなくてよかったのだろう。

去っていった紅以上に、俺の心にはみゅうとの思い出が濃く残っている。俺はみゅうに恋をしていたのか？ 本当に俺はロリコンなのか？

いや、ロリコンなのではない。幼女なんてのは可愛いだけで、恋愛対象にはなりっこない。そうではなく、俺は妹がほしかったのだ。俺が十七歳の年に母が羞恥の色を浮かべて、息子たちに報告してくれたのも思い出した。

「母さんは四十歳もすぎたから、とっても恥ずかしいんだけど、あなたたちに弟か妹ができるのよ」

「養子を迎えるんですか」

間抜けな反応をした俺の横で、将一兄は言った。

「恥ずかしくはないでしょう。だけど、母さんは若くはないんだから、身体をいたわって下さいね。隆也、これからは家事はおまえと俺とで分担しような」

「ああ、そういうことですか」

当時、兄は十九歳の大学生で、俺は高校生だった。十七歳のガキにしても幼い反応しかできなくて、俺は恥ずかしかったものだ。

「大丈夫よ。あんまり静かにばかりしているよりは、私だって動いたほうがいいんだから。でも

、頼もしい大きな息子たちがいてくれて助かるわ」

頼りになるのは兄ばかりで、俺なんてなんにもできないよな、とひがんでいたのも思い出す。あのころから兄は精神的には大人だった。

交響楽団の指揮者であった父は、楽団の公演などで家を留守にする場合が多い。母が妊娠中には兄が母の精神的な夫の役割を務めていて、俺は兄の補佐に徹していた。母のおなかがふくらんでくるにつれ、俺は夢見るようになっていった。

十八歳も年下の赤ん坊が生まれる。妹だったらいいな。妹がほしい。しっかりした兄に弟として従っていた俺の立場に、妹の兄という立場が加わる。母さんに似た可憐な妹、早く生まれておいで。

勝手に妹だと決め込んで、名前まで考えていたものだから、実際に生まれた赤ん坊が男の子だったときにはがっかりした。なんだ、男か、と口走って、兄に叱られて殴られた。ふたつ年上の兄はあのころは現在ほどには老成していなかったからか、俺は時折兄に殴られていたのだ。

「だけど、正直言うと俺も妹のほうがよかったかな。弟はおまえがいたら十分なんだよ。それはそれとしても、母さんの前と言うな」

「はい、すみません」

おまえって兄貴に敬語で喋るの？ と友人に驚かれたりもしたのだが、中学生くらいのころから兄には丁寧な口をきくようになっていたのは、兄は年齢以上に大人で、俺にとっても父親がわりのようなところがあったからだ。

親父にだって敬語では喋らないぜ、が一般家庭であるらしかったが、兄も俺も父にも母にも丁寧な言葉遣いをした。父に強要された記憶はないが、威厳のある父だったからなのだろうか。

ソフトで優しい母にも、そうなる自然に敬語を遣うようになり、我が家はよそとはいっぴうちがっているみたいだな、と思っただけなのに、家庭の色合いはさまざまなのだから、家風があるのは当然だとも思っていた。

そうして俺たちに年の離れた弟ができた。父としては中年になってから生まれた末っ子が可愛くてたまらなかったのだろう。上の息子たちにはきびしかった父は、幸生を溺愛していた。

年齢が近かったとしたら、俺はひがんだかもしれない。十八にもなっていたから、父さんも母さんも幸生ばかり可愛がる、とは思わなかったが、兄は兄で別の心配をしていた。

「あれでは幸生が甘やかされすぎて歪むよ。俺は父さんに言う。俺が幸生をきびしく躰けるから、おまえも手伝えよ」

「父さんは仕事が忙しいから、たまに家にいると幸生を可愛がりたくなくて甘やかすのも当たり前なんだろうけど、甘やかされすぎるとスポイルされるとはよく聞きますよね。よろしく頼みますよ、兄さん」

父にもその懸念はあったようで、幸生にきびしく接する役目は兄に託された。

幸生が赤ん坊ではなくなる頃になると、兄は末弟に体罰を与えるようになった。母に向かって駄々をこねている幸生を抱え上げて部屋に放り込んだり、正座をさせたり、ごく稀には軽めにひっぱたいたりもした。幼児にはこれでいいんだ、と断固として言う兄に、俺も賛成した。

母はそんなときにはうろたえていたので、兄に叱られて泣いている幸生を横目で見て、俺は母に囁いた。

「母さんはあとで幸生をなぐさめてやって下さい。怖いお兄ちゃんだね、だからね、お兄ちゃんに叱られないように、いい子にするのよ、って」

「それって私は卑怯じゃない？」

「いいんですよ」

両親が生きているころには、きびしい父は兄の役目。優しい母は当然ながら母で、父は甘いおじいちゃん役であったようだ。俺は幸生の兄でしかなかった。両親が亡くなってからは、兄が幸生の父となり、そうなっても俺は兄でしかなかった。

「隆也兄ちゃんも将一兄ちゃんにお仕置きされた？」

「俺はふたつしか年のちがわない弟だから、お仕置きってのは父さんにされたんだよ。兄さんには殴られたことはあるけど、兄貴として鍛えてくれたんだな」

「殴られたの？」

「そりゃそうだ。俺が悪いからだけど、ほっぺたを張り飛ばされたよ。おまえは叩かれるって、ぱちんとかぴしゃんとか程度だろ」

「うん、僕がちっちゃいころで……悪い子になったときだよ。僕が悪いから叱られて叩かれたり、お仕置きされたりしたのは知ってるけど、兄ちゃんたちは兄弟喧嘩はしないの？」

「おまえも兄弟喧嘩がしたいのか？ 俺とだったらできるんじゃないかな」

「できないよ。兄ちゃんたちは大きくて強いもん」

そんなに俺は強くないよ、とは弟の前では言わないほうがいいのか。

俺が兄と兄弟喧嘩をしなかったのは、できなかったからだ。ふたつの年の差にすぎないのに、兄は俺にとっては仰ぎ見る存在だった。大人になってくると、兄にも人間的な弱みはあるのだと知るようになっていったが、ガキのころのほうがむしろ、兄を神聖視していたのかもしれない。

小学生くらいまでは兄は幸生に体罰も与えたが、十にもなると悪さをしてでも説教するだけになって、叩いたりはしなくなった。

きびしい役割は兄にまかせていたのだから、俺には母的役割もあったのか。いつしか幸生は、隆也兄ちゃんのほうが優しい、と考えるようになったと思えるのだが、兄のきびしい躰を感謝しているとも思える。

そうすると、幸生はひとりっ子同然で育ったのだ。父である長兄と、母に近い次兄。俺は兄ではあっても幸生とは年が離れすぎていて、年齢の近い兄弟のようにはいかなかった。

しかし、そうすると俺だって、兄を尊敬しすぎて兄弟喧嘩なんてしなかったのだから、一時はひとりっ子だったのか。父の留守が多かったから、兄は子供のころから俺の親父の役割もしていたのか。我が家はやはりやや特殊だったのだろう。

特殊な家庭で育ったのだとしても、俺はまっとうな男に育った。幸生もまっとうな少年に育った。すべては兄のおかげだ。いまや兄は我が家の家長であり、俺はそれについての不満はひとかけらも持っていない。兄がいなかったとしたら、俺ひとりでは幸生を育てていけなかったのだから。

まだまだ幸生は子供なのだから、今後とも俺は兄の補佐をしなければならない。結婚なんかしている場合でもないだろうから、彼女にふられてよかったのだ。

そうは言っても彼女がいないと寂しくて、しきりにみゅうが思い出されるのか。みゅうが我が家や山荘にいたころ。特に山荘でみゅうとふたりっきりだった一時期が心に浮かぶ。人間でいても残虐な部分はあったのだが、どんなときでもみゅうは可愛かった。

自分自身の寂しさばかり思っていたが、幸生は俺以上に寂しいだろう。なのに、弟は気丈にふるまっている。近所にひとつ年上の友達ができただけもあるのだろう。

丈人、真次郎、章。この三兄弟はうちの三兄弟ほどに年は離れていなくて、両親は故郷にいる。末弟の章が幸生とひとつちがいで、妙ないきさつで親しくなった。我が家の変身猫はふるさとに帰っていったのだが、丈人と真次郎の変身は持続している。

変身猫がいるのだから、エイリアンに改造された人間だっているのだろう。みゅうという存在を知って以来、俺たちも些細なことでは動じなくなった。改造人間は些細ではないが、みゅうだって些細な生物ではない。

章の兄たちが改造人間であり、地球の平和のための地球防衛軍に所属していると言ったって、俺たちには無関係だ。無関係どころか、人間の手には負えない猫男なんて奴をまかせられるのだから、都合がいいと言っている。

それよりもなによりも、幸生に章のような友達ができただけが嬉しい。なかなか乱暴者の兄貴たちと同居している章は、兄たちに似て乱暴者でもあるようで、少年はああいって少年とつきあって自身を鍛えるべきだ。

どちらかといえば幸生は軟弱少年である。気が優しくて可愛い少年ではあるが、男としてはそればかりではいけない。が、章ほどになってしまうのも問題ではあって、かねあいはむずかしいのだが、そのあたりの判断も幸生がつけられるようになるだろう。

「あいつは兄貴たちが強力すぎるから、図に乗ってるよな。章は普通の人間だろうに」

兄はそう言っていた。

「あっちの兄貴たちは人間としては未熟で、力ばかり強いんだろ。弟の教育って点でも未熟だよ。章はどうも……」

「粗野ですよ。だけど、俺たちが関知する必要はないでしょ」

「ないんだけどさ、ま、いいよ。隆也は新しい彼女はできたのか」

「できません。兄さんは彼女とは？」

「疎遠になってるよ」

みゅうのせいだろうか。兄もまたみゅうに？ みゅうは身体は少女で、心は猫でもあり幼児のようでもあったが、まさしく魔性の猫娘だったのだから、男心を狂おしくさせた。みゅうを近所の方々の目から隔離するために、兄と俺は山荘で暮らしていたのだが、その必要もなくなって、東京の家での三人暮らしに戻っている。

兄の心もみゅうを追い求めているのだろうか。猫人たちの里に帰ってしまったみゅうは、幸生の夢には出てきているらしいのだが、俺の夢には出てきてくれない。今夜は出てきてくれないだろうか。あれこれ考えて気が散って、仕事ができないので、俺はパソコンの電源をオフにした。このコードをかじっては、俺を困らせたみゅうはもういない。せめて今夜は夢に出てきて、隆也兄ちゃん、抱っこ、と甘えてほしかった。

猫男が言っていたのだったか。幸生も章も夢の中では女の子に変身すると。弟であっても他人の夢には入り込めないのだから、事実なのか否かは知らないが、今夜、俺は俺の夢の中で女の子になった幸生と章に会った。

いくぶんシャープな顔立ちの章は、女の子になると鋭角味が強気の女っぽさに変化する。気のきつそうな美少女だ。

少年でも比較的丸い雰囲気の幸生は、女の子になるとたいそう可愛らしい。妹のユキが赤ん坊になって、十四年前に俺たちのもとに誕生すればよかったのに、と考えるくなる。妹のユキも相当な美少女だ。

女の子になると少年たちは背が縮むようで、普段よりも小さい。ユキもアキラも俺の胸くらいまでしか頭が届いていなくて、俺を見上げてユキが黄色い声で話しかけてきた。

「お兄ちゃまあ、来たのね」

お兄ちゃま？ 妹だったらこう呼んでくれるのか。なんて可愛いんだろ、としか考えられなくなって、俺はユキを抱き上げた。

「やあんっ!! ユキ、おいたなんかしてないよ」

「したのかとも言っていないのに、してないと言うってことは、なにかしたんだろ？」

「.....言わないもん」

「おいたをしたんだったら言いなさい」

「してないもん」

「ほんとかな。アキラ、きみは？」

「俺もなんにもしてないよ」

こっちは女の子になっても言葉遣いが変わらない。不満そうに口をとがらせて俺を見上げる顔つきは、しかし、可愛いのがあった。

「なにかしらしたんだらと思うけど、訊くのはうちに帰ってからだな。ユキもアキラも、女の子がこんな時間に外にいただけでも悪い子だろ。帰るよ。アキラもおいで」

むっつりしたままではあったが、アキラがついてくる。俺はユキを抱えて歩き出す。大人の女性もみゅうも、抱いて歩いた経験はあるが、本物の妹を抱えて運ぶのははじめてだ。

本物の妹って、夢だろ、これは、ではあるのだが、みゅうがいなくなり、恋人にもふられて、女を抱えて歩けなくなった俺に、神さまが夢で楽しいひとときを与えてくれているのだ。やわらかな少女の身体、甘い香り。こうして歩いているのは至福のひとときだった。

俺の首に両腕を回して、ユキが甘えている。みゅうではなくても、実は弟なのだとしても、甘えられると嬉しい。可愛くて可愛くて可愛くて、胸がきゅんきゅんしていた。

「お兄ちゃまの身体の中で、ユキは可愛い可愛い、って声が聞こえるよ。弟の幸生だったら可愛くないの？」

「可愛さの感覚がまったくちがうんだな。幸生だって可愛いけど、ユキになってるおまえはなおいっそう可愛いよ。だけど、アキラがひねくれてないか？ アキラの兄さんも呼んでやれよ」

「将一お兄ちゃまだったら、ユキとアキラを片手ずつで抱っこできるよ。隆也お兄ちゃまにはできないの？」

「できません」

「なーんだ、弱虫」

「弱虫かもしれないけど、アキラは妹じゃないんだから、しちゃいけないだろ」

「そっかな。アキラ、どっちがいい？」

「どっちもいらねえよ」

どっちがいいと思う？ とユキが囁く。俺は応えた。

「真次郎はきわめつけの荒っぽい青年だから、丈人がいいだろ。丈人だって弟には荒っぽいけど、妹だと優しいんじゃないかな」

「そうだよな。隆也お兄ちゃまは妹にも弟にも優しいけど、普通は差別するの？」

「するんじゃないかな。丈人を呼んでやれ」

「はあい」

夢ってのはユキには自在に操れるのだろうか。これはユキの夢に俺がまぎれ込んでいるのか。幸生の夢か。俺の夢なのか。アキラの夢なのか。いくつもの夢が混濁しているのか。

そう考えていた時間がいかほどだったのかも知らないが、ユキが名前を呼ぶと、丈人が出現した。彼はあたりを見回してから、アキラを片腕で抱え上げた。

「隆也さん、こいつがまたご迷惑をおかけしたんですか」

「迷惑じゃないよ。ただ、ユキとアキラはふたりしていたはずらをしていたようだな。なにをしたのかはアキラに聞いて」

「おまえって奴はまったく……では、俺はお先に失礼します」

アキラの悲鳴を残して、超人は超人的スピードで去っていった。

「優しくなくない？」

「丈人にしたら優しいほうだろ」

「そうなのかな。あれで？」

「おまえだって、やったはずらってのの多寡によっては、俺も優しくはないかもしれないぞ」

「きゃんきゃん、やんやんっ」

騒がしい妹を抱いて歩き続ける。夢の中ではどうやって家に帰るのだろうか。俺はどこへ向かって歩いているのだろうか。わけもわからず歩いていると、腕の中の愛しい重みが消え失せた。

「ユキ？」

遠くにほの白く見えるものがある。近づいていくと輪郭が定まってきて、少女の姿になった。

「ユキじゃないよな。誰？ みゅうか？ 出てきてくれたのか」

「隆也兄ちゃん」

耳のみが猫で、身体は少女のみゅうだ。銀白の長い髪をして、俺たちの家にいたころに俺が買ってやった、ライムグリーンのワンピースを着ていた。

「大きくもなってないな。みゅう、おいで」

「みゅうは人間の夢にだったら出ていけるようになったんだよ。幸生の夢に出ていったんだけど、そこに隆也兄ちゃんも来たんだね」

「おまえが呼んでくれたのか。幸生は？」

「起きたんじゃない？」

「俺は幸生の夢にいる。そうして幸生は目覚めた。俺は夢の国に閉じ込められたのか」

「どうなんだろう。知らないけど、みゅうがいるんだからいいじゃない？ 隆也兄ちゃん……お兄ちゃまって呼んでほしい？」

「気持ちを讀んでるんだな。おまえの好きなように呼べばいいよ」

「うん、隆也お兄ちゃま、大好き」

永遠に目覚めず、夢の世界で生きる？ それは嬉しくないが、考えてもどうにもならないのだろうから、ひとまずはみゅうを抱きしめた。

三角の耳が俺の顎をくすぐる。お兄ちゃま、お兄ちゃま、好き好き、と囁く声が俺の耳元をくすぐる。人間の爪のはえた細い指が、俺の胸元をくすぐる。みゅうのすべてに俺のすべてがくすぐられる。ハートも強烈にくすぐられる。

目覚めなくてもいい、かもしれない。夢の国で夢に浸って、朽ち果てていくのもいいかもしれない。そうまで考えそうになって、思い当たった。

「そうなると現実の俺は植物人間みたいになって、兄さんや幸生に一生面倒をかけるんじゃないのか？ それはやっぱり駄目だよ。みゅう、帰らせてくれ」

「帰らせるたって、みゅうにはできないよ。植物人間になんかならないから大丈夫。それよりもね、これは覚えておいて」

小さくしなやかな手の指が、俺のシャツの胸を開いた。爪だけが猫に変化して、みゅうはその鋭い爪で俺の素肌に刻印を残した。

「タトゥ？」

「彼女に見られたら困る？」

「なんて彫ったんだ？」

myuだった。

「みゅうに会いたくなったら、ここを手で押さえて、みゅうって百回呼ぶの。そしたら夢に出ていってあげる」

「百回か。唱えてる途中で寝てしまいそうだよ」

「寝ちゃったら出ていかないからね。毎晩はみゅうの夢を見なくてもいいでしょ」

「そうだな」

外見は少女だが、中身は成長しているのか。瞳に大人びた光を宿して、みゅうは言った。

「みゅうは隆也お兄ちゃまだけのものじゃないけど、夢の中ではひとり占めできるよ」

「そっか。それでもいいよ」

「だからね、お兄ちゃまは人間の彼女を見つけなさいね」

「鋭意努力します」

「彼女ができるまでは、みゅうがお兄ちゃまの夢の恋人になってあげる」

「じゃあ、こうしていいか」

こくっとうなずいたみゅうを強く抱きしめ、くちびるを合わせた。おでこや頬にはキスをしたりされたりもしたが、くちびるとくちびるが触れ合う、みゅうとのファーストキスだった。

目覚めることはできたのだが、夢の残滓が色濃くまとわりつく。俺はパジャマの胸をはだけて、myuの文字を見ようとした。

「……ある」

あるはずのないものがあつた。あれは夢ではなかったのだろうか。

いや、夢は夢だ。夢ではあってもみゅうなのだから、夢の国で現実にも残るタトゥを俺の胸に彫つたのだ。鋭い爪で彫られても痛くもなかった、みゅうの爪痕が胸にある。

夢の中では俺にもしっかり読める大きさだったが、目覚めてから見るとごくごく小さい。myuとは読めない。ルーペを取り出して確認してようやく読めた。淡いピンクの、虫刺されみたいな、痣みたいな文字だった。

小さな小さなものだから、蚊に食われたと言っても通用するだろう。現実の恋人ができたとして、彼女と裸で抱き合ったら見えるであろうが、もしも彼女に読めたとしたら、いたずらで彫つたとでも言うておこう。

兄や幸生に見られる恐れもあるが、こんなところに痣ができちまったよ、とでもごまかしておこう。その程度の爪痕だ。

「みゅうって英語ではどう書くの？」

「こうだよ」

教えてやったのは俺だ。山荘にも我が家にも、みゅうの爪とぎ跡とともに、小さな爪の落書きが残っている。俺の楽譜にも、みゅうが肉球に泥をつけて歩いたしるしの、薄いスタンプが残っている。兄の楽譜や幸生のノートにも残っている。

先っぽがぼろぼろになった猫じゃらしは、みゅうがかじった跡。人間のみゅうが着ていたワンピースもある。兄も処分するのが忍びないのか、捨てるとは言わないので、みゅうを思い出しやすい品物が、我が家にはいくつもあつた。

形のないものも無数にある。兄には兄の、幸生には幸生の、俺には俺の心にみゅうが刻んでいった思い出の最後が、このタトゥだったのだろう。

みゅうがいなくなつてからだと、さして日は経過していない。両親の追憶でさえも日増しに遠のいて色褪せていき、現在ではただなつかしいだけなのだから、猫だってそうなるはず。たまに夢で会えたらそれでいいよ。みゅう。

俺にそう思わせてくれるために、おまえはああやって夢の世界に導いてくれたんだね。いつまでもいなくなった誰かにとらわれていては駄目、って？

そうだね、おまえの言う通りだよ、と俺は、みゅうに語りかけた。実際、百回もみゅうと唱えるのはむずかしいので、よほどの際でもなければみゅうに夢で会いたいとは思わなくなつていた。こうしてみゅうも過ぎ去りし追憶と化していくのだろう。

そして、みゅうを忘れられそうな出来事が起きた。学校の冬休みも残りわずかになった、一月初旬の日だった。

「隆也兄ちゃん、ほら」

宿題をやると言って章の家に行っていた幸生が、三毛猫の子供を抱いて帰ってきた。三毛猫な

のだからメスだろう。みゅうとはちがった体型の、丸っこい子猫だ。

「いいでしょ？」

「今度はこいつがうちの子になるんだろ。名前は？」

「ミケって安直だよな。なににしようかな」

「名前はおまえが考えろ。トイレだのメシ皿だのってのはみゅうのお古でいいのか。新しいのを買ってこようか」

「こうなったらみゅうのためのものはみんな捨てて、この子に新しいのを買ってやったほうがいいよね」

「そのほうがいいだろうな」

俺がペットショップに行っている間に、兄も帰っていて、幸生は猫の名を教えてくれた。

「メイメイ、中国語で妹とか小さい女の子って意味なんだって」

「妹だよな、この子は俺たちみんなにとって。しかし、三毛猫というのはかなり太る猫種じゃないのか。貫禄のあるおばさん猫になるぞ」

兄が言い、俺も言った。

「そのほうがいいですよ。変身猫よりはずっといいでしょう」

「当然だけどな」

男心を惑わせる美少女猫なんかよりは、一年もすれば太ったおばさん猫になる猫がいい。今度はごくまっとうに、猫のいる生活を送ろう。

漢字では「妹妹」と書くメイメイはみゅうほどのいたずら猫ではなく、あまり活発なタチではないようだ。おとなしい猫もいるのだと知識としてはあったが、みゅうのいたずらぶりが記憶に新しいので、メイメイの静かさはむしろ新鮮だった。

「メイメイってヤギの鳴き声みたいだから、メイって呼ぼうね」

幸生の提案でそう呼ぶようになったメイは、ゆったりのぴのびして、子猫であってもおばさん猫のようだ。

年が明けて本格的な高校受験生になった幸生は、受験勉強にも大忙しになる。一月、二月は幸生は勉強に忙殺されていたのだが、メイの面倒もちゃんと見ていた。兄と俺の仕事も順調で、メイも変身するようにはなくて、俺は幸生の受験勉強につきあって徹夜で仕事をしたり、夜食を作ってやったりもして協力はした。

桜開花予想が出るころには、幸生の桜も咲いた。これで春になれば幸生は章の高校の後輩となる。幸生は章の家にも報告に行き、帰ってきてから言った。

「章くんの兄さんたちも喜んでくれて、お祝いしてくれるって言ってたよ。お祝いだったらカニがいいって言ったら、カニを食べられて温泉に入れるところへ六人で旅行しようって。僕も旅行に行きたいな」

メイはペットショップで預かってもらおうと決まり、六人で北陸地方へと旅行するとも決まった。カニはやや時期が遅いのだそうだが、まだ食べられるとのことで、六人乗りのレンタカーを借りた。将一兄がハンドルを握り、男六人旅行とあいなったのは、幸生の卒業式も終わったころだった。

「メイは変身はしないんだろ」

章が尋ね、幸生は応じた。

「しないしない」

「今はしなくても、もうちょっと大きくなったらしないか？」

「しないよ。メイは普通の猫だもん」

幸生と章はメイの話をしていて、真次郎は俺に話しかけた。

「越前ガニってうまいんでしょ。俺は旅館の豪勢な晩メシが楽しみだな」

「きみらだったら、旅館のメシじゃ足りないんじゃないのか。普段だって普通の人間の百倍ほどは食うんだろ」

「そんなには食いませんよ。二倍ほどかな」

真次郎と俺はメシの話をし、丈人は将一兄と話していた。

「カニも温泉もいいけど、海もいいですよ。将一さん、寒中水泳しませんか」

「越前の海はこの季節だと荒れてるんじゃないか。俺はいいから、真次郎くんとふたりで泳げ」

「寒中水泳はいい鍛錬になりますよ。真次郎、ついたら泳ごうか」

「泳いでもいいぜ」

常人は超人とつきあうと、ひどい風邪を引いてしまいそうだ。真次郎は章にも泳ごうと言い、章はうぎやうぎやといやがっていた。

免許を持っている四人が交代で運転し、夜には福井県越前地方の旅館に到着した。幸生は家族旅行の経験は少ない。両親が活着しているころには父が留守がちだったから、母に連れられて近場に行くくらいだった。両親が亡くなってからは余裕がなくて、兄も俺も遠くに連れてきてやったことはない。

子供だった幸生を動物園や遊園地に連れて行ってやったときと同じくらいに、今日ははしゃいでいる。章も嬉しそうにしている、二室に分かれている部屋の俺たちのほうへとついてきて、早速幸生とじゃれていた。

「こら、章、おまえの部屋はこっちだろ。あばれてないでこっちへ来い」

俺たちの部屋を覗きにきた丈人に言われても、章は幸生と取っ組み合っていて聞いていない。丈人はそこに歩み寄って行って、章の襟首をぶらさげて連れ出していった。

「すみません。あとで風呂に行きましょうね」

そう言って丈人は出ていき、幸生は言った。

「みんなでお風呂？」

「温泉の大浴場は広いだろ。楽しいぞ、きっと」

俺が言うと、兄も言った。

「ただし、風呂場でも行儀よくしてろよ。他の人たちに迷惑をかけるような真似をしたら、章もおまえもつまみ上げてほっぽり出すぞ」

「将一兄ちゃんが？」

「丈人にやられたらおまえが怪我をするかもしれないから、先に俺がやってやるよ」

「うん、そのほうがいいよね」

宿の浴衣と丹前に着替えて、六人で温泉大浴場に行く。超人の裸はどういうものなのだろう

かと、俺はそこに興味があって、服を脱ぐ丈人と真次郎に注目していた。

背丈は俺たちとそうは差がない。身長順だと将一、丈人、真次郎、俺となるだろうが、僅差だ。筋肉にしても俺は別として、あとの三人は似た体格に思える。丈人と真次郎の改造は中身か。サイボーグになっているのではないからこそ、こうして温泉にも入れるのだろう。

「隆也兄ちゃん、男の裸をじろじろ見るって変だよ」

幸生が言い、章も言った。

「丈人ってちょっと変態だけど、隆也さんも変態？」

こらっ、失礼な、と言って丈人が腕を伸ばす。章は逃げ出していき、幸生も章を追って走っていった。ほっそりした少年たちの後姿を見送っていると、丈人が俺の胸に顔を近づけてくる。真次郎も言った。

「兄貴はよお、そうやって男の胸なんか見て……だから変態だって言われるんだろ」

こらこら、走るな、と言いながら将一兄は少年たちに続いて大浴場に入っていき、丈人は言った。

「見てみる、真次郎、隆也さんのここ」

「ここって胸か？ だから、男の胸なんか見ても面白くもなんともねえだろ。女の子の胸だったら見たいけど、隆也さんの胸なんか見たくねえよ」

「面白いから見ろって」

「面白いのか」

男ふたりに裸の胸を凝視されても、俺だって嬉しくも面白くもない。女に見つめられて頬を寄せてこられたら、相手によっては楽しいが、丈人と真次郎だったら身の危険までもを感じる。寄ってこられるのを避けようとしていて、思い出した。

メイが我が家の一員となったせいもあるのだろうが、近頃はみゅうをほとんど思い出さなくなって忘れていたのだ。俺の胸にはみゅうが彫った刻印が残っているのだった。

とはいえ、ほんの小さな痣のようなものだ。いくら超人でも肉眼では文字を判読できないだろうと思って、俺は言った。

「おまえたちだと抱きしめたくもないけど、俺の胸がどうしたんだよ。貧相な胸板だとでも言いたいのか」

「そうじゃなくて、な、真次郎？」

「ああ、貧相っちゃあ貧相だけど、うん、これか」

「貧相っちゃあ貧相だと？」

おまえら、俺に喧嘩を売ってんのか、と言って、ああ、そうだ、と言われても困る。俺がストレートに腕力勝負をしても、こいつらに勝てる可能性は一パーセントもない。いささかむかついていると、丈人が言った。

「自分でやったんですか。いまだみゅうに？」

「読めるのか」

問い返すと、真次郎が言った。

「兄貴も俺も耳も目もいんですから、ちっこいちっこい文字だって読めますよ。これってなんのおまじないですか」

「おまじないね。うん、そうだよ。みゅうの化け猫パワーにあやかりたかったんだ」

「それだけ？」

言った丈人にうなずくと、ま、そういうことにしておこうか、などと言って、超人兄弟も風呂場に向かった。

あのふたりは俺がみゅうにまだ未練があって、myuの文字を自ら胸に刻んだのだと思っているのだろうか。別れた恋人の名を腕に彫る男女もいるようだから、そう受け取られたのかもしれない。別段、彼らがそう思ってもかまわない。

最後に俺も浴場に入っていくと、他人は三人ほどしかいなくて、幸生と章が広い風呂場を追いかけっこして走り回っていた。湯のかけあいをしたり、互いに互いを湯船に落とそうとしたりして大はしゃぎだ。

しまいには幸生がはね散らかした湯が、かなり遠くにいた老人のところへ飛んでいき、とうとう将一兄が叱りつけた。

「他のお客に迷惑をかけてるって、わかってないのか。高校生にもなってもおまえはまだそんなか。おとなしくしろ」

途端に幸生はしゅんとし、老人に向かって言った。

「ごめんなさい」

「わしはいいんだけど、兄さんかい？」

「はい。このひととこのひとが僕の兄で、あのひととあのひとはこの子の兄さんです」

「兄弟旅行なんだね。若いんだからちっとはいいさ。しかし、あんた」

「はい？」

「いやいや、今どき珍しく……あんたも若いのにね。うんうん」

将一兄になんと言おうとしたのか、老人は皆まで言わず、幸生と章を手招きした。うへっという顔になったものの、ふたりともに老人に近寄っていき、説教されている様子だった。丈人は苦笑いで言った。

「俺には将一さんみたいにはできないから、おじいさんに説教してもらいましょうか」

「章は口答えしないかな」

真次郎が言い、将一兄は言った。

「そのときには真次郎がとっつかまえて、頭を押さえて詫びさせればいいんだよ」

「そうですね。そうしますか」

「おまえだったら口より先に脚が出るだろ」

丈人も言って、かかり湯をしてから四人で湯に漬かった。

とろりとした湯の中で、俺は俺の胸を見下ろす。兄にも見えていても文字までは読めないようだが、俺には読める気がした。

あれからたったの二ヶ月ほどで、俺はおまえを忘れかけていたよ。それでいいんだよ、って言うか、みゅう？ そのほうがいいのかもしいけど、今夜はおまえに会いたいな。みゅうの名前を百回唱えるためには、酔ってはいけない。酔うと寝てしまう。

今夜はカニに意識を集中して、酒は適当にしておこう。眠る前におまえの名前を百回呼ぶから

、出ておいで、みゅう。おまえに夢で会いたい。夢でいいから、夢こそがいいから会いたいよ。

END

夢で会えたら

<http://p.booklog.jp/book/32282>

著者 : quianred

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/quianred/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32282>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32282>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.